地域を結ぶ総合情報誌 月刊「商工会」

平成18年6月25日発行（毎月25日発行）第47巻7号通巻564号　昭和36年9月29日第3種郵便物認可

Shokokai

7

2006
JULY
No.564

まちづくり特集

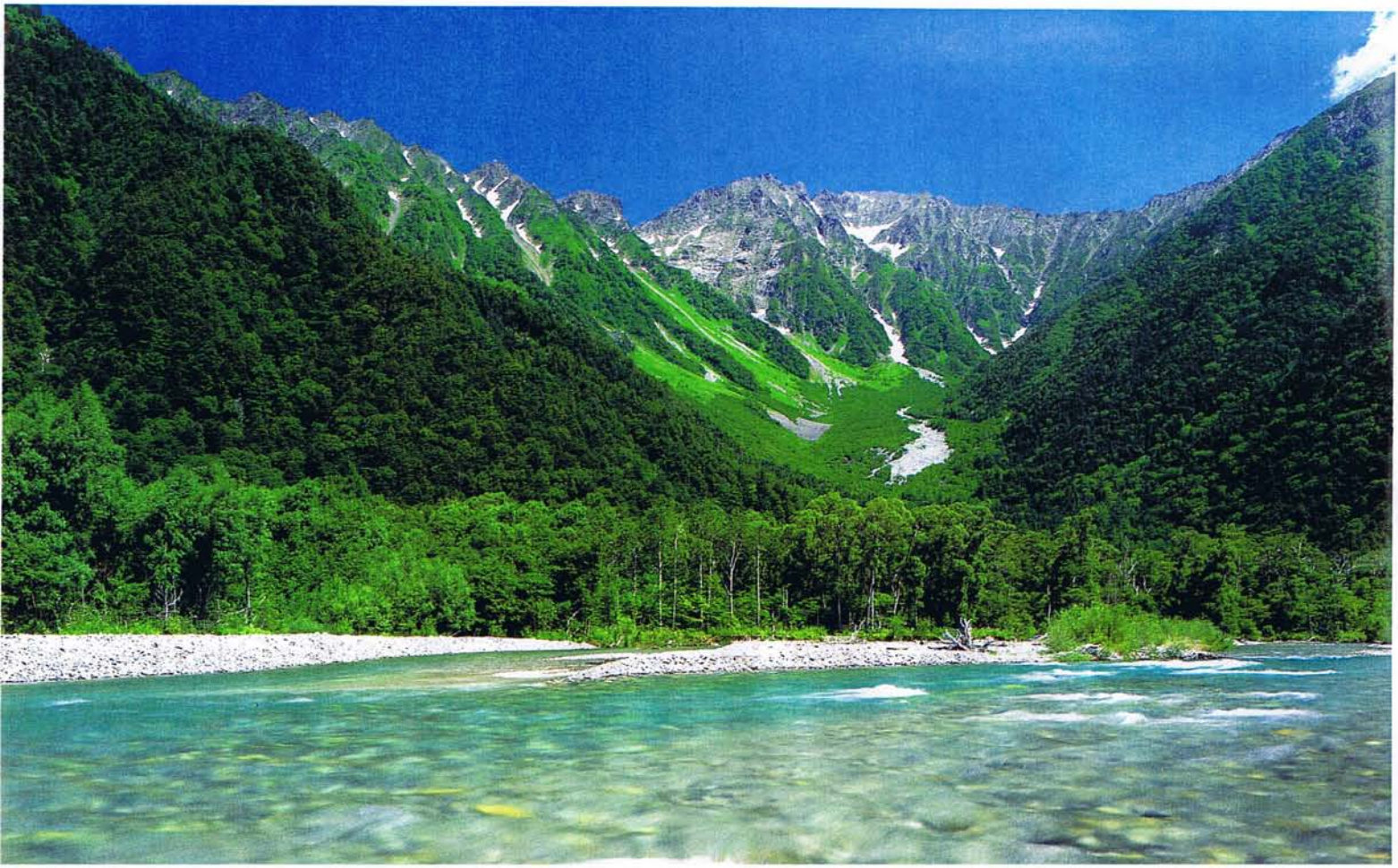
- 座談会／これからのまちづくりとは
- 事例取材
  富山県八尾町商工会・広島県上下町商工会
- 知事・県連会長／地方を語る（岐阜県）

特別取材 Good My Town（神奈川県逗子市／大阪府大阪狭山市）

わがまち・わがむら

★全国各地の商工会を現地取材。最新情報と旬の話題が満載です。

- この道を行く　オンリーワン企業めざして
- 商店街を元気にする全国のアイデア
- 経営指導員 山川章光奮闘記
- 成熟時代の戦略人事
- 今さら聞けないITセキュリティー



事例❶ 富山県富山市 八尾町商工会

東大と連携し、住民主体のまちづくり

中心市街地の空洞化が広がる中で、全国各地で商店街の活性化対策が進められている。最近とくに注目されているのが、大学と商工会や行政、さらには商店街が連携したまちづくりだ。そこで、大学と商工会が連携してまちづくりを進めている富山県八尾町商工会と、広島県上下町商工会の取り組みを取り上げる。

動き出した「八尾プロジェクト」

平成十七年、新市に入った富山県八尾町商工会は、平成十六年度から東京大学都市デザイン研究室と連携し、「八尾プロジェクト」と名づけたまちづくりを進めている。都市工学が専門である西村幸夫教授を中心に、大学院生八人から成るチームが中心市街地再生のため、調査や地域の人々とのワークショップなどを通じ、まちづくりに関しての提案を行っている。

同研究室では平成十六年度、十七年度の二年間にわたり、町内の二つの地域について調査を行い、提案書を作成した。八尾町商工会では、同提案に基づき、「市と連携して、できるものから実施していきたい」（中村美智則事務局長）としている。十八年度も同研究室とのまちづくりを継続する計画で、どのような形で連携するのか現在検討中だ。

八尾町商工会は、町の中心市街地活性化基本計画策定を受け、平成十年から中心市街地活性化事業に取り組んでいる。行政がおわら資料館やコミュニティセンター、ポケットパークなどハード面での事業を行ったのに対して、商工会では空き店舗対策や年間を通したイベント開催などソフト面での事業を中心にまちづくりに取り組んできた。

空き店舗対策では、製販一体型の店舗ギャラリー「風まかせ」や、観光情報が収集できる休憩施設「風来坊」、観光土産店「風の館」として、観光拠点である観光会館前の空き店舗を改装した。その結果、これまで人通りが少なかったところが、観光スポットとして生まれ変わり、人が集まるようになった。

「風の盆」を生かした通年観光で観光客倍増

八尾町は、春には「曳山祭り」、夏には「おわら風の盆」という全国的に注目されている伝統行事がある。町を訪れる観光客は、「おわら風の盆」が開催される九月一日から三日までの三日間に集中。そこで、平成十年から、三日間以外にも風の盆の雰囲気を味わってもらおうと、保存会の人たちを中心に毎月第二、第四土曜日に「風の盆ステージ」を開催、風の盆についての講義や保存会の人たちによる踊りの指導などを行っている。

また、平成十五年からは毎月第二土曜日に、中心商店街を歩行者天国にして、そこに一坪テントを設け、地元の農家の人や、町外の人などにテントに出店してもらい「風の市」を開いている。毎月第二土曜日は、風の盆ステージと重なるため、県・町内外から大勢の人が訪れる。風の市は商店街の人たちが自主的に企画し、実施しているものだ。

その結果、通年で観光客が訪れるようになり、観光客が倍増した。ちなみに、平成十年には年間の観光客は三五万人で、そのうち二〇万人が風の盆の期間だったが、平成十五年には年間観光客は七〇万人、風の盆期間中は三〇万人と大幅に増えた。

その一方で、周辺地域に大型店の出店が相次ぎ、商店街の空洞化も目立つようになっている。八尾町全体の小売業の売り場面積が一万八〇〇〇平方メートルであるのに対して、平成十二年には売り場面積四万六〇〇〇平方メートルのショッピングセンターが隣町にオープンした。

そこで、八尾町商工会では町の意向を受けて、大学と連携し、住民主体のまちづくりに取り組むことになった。まちづくりを行うにあたり、八尾町と歴史や文化、町並みが比較

「日本の道百選」にも選ばれた諏訪町通り

的似ている岐阜県飛騨市古川町（現・飛騨市）のまちづくりを参考にするため、視察を行った。行政と住民が一体となったまちづくりに接して、「目からうろこが落ちた思いがした」と、中村事務局長は当時を振り返り、語っている。「上から押しつけたまちづくりではなく、住民主体の取り組みを身近で見て、これが本当のまちづくりだと思った」（中村事務局長）。

西村教授は飛騨古川町で二〇年間にわたり、まちづくりに取り組んでおり、二〇年前は田舎の小さな町だった飛騨古川町を現在では年間一三〇万人も訪れる町に変貌させている。八尾町のまちづくりに西村教授の協力をお願いしたところ、「八尾町には非常に興味を持っている」ということで、引き受けてくれた。

町の玄関である駅周辺を再開発

平成十六年度は、JR高山線越中八尾駅を中心とした福島地区周辺の再開発に向けての調査から着手した。駅周辺は、おわら風の盆の期間は七万人が乗降し、八尾町の玄関ともなっているにもかかわらず、閑散としており、商店街は衰退の一途にある。

東大都市デザイン研究室では、大学院生八人が町に入り、一軒一軒訪れ、住民や商店主の声を聞くなど詳細に現地調査を行った。調査は一年間に五回行われた。大学院生は毎回、一週間程度町に泊まり込み、時には住民と酒を飲み交わしながら、意見を交換した。「住民のほうも学生であることから、普段から思っていることを言いやすかったため、本音で話しができたようだ」（勝原隆彦広域担当経営指導員）。

その後、問題点をチェックするため、住民や商店主などを集め、ワークショップを二回開き、意見交換を行った。調査をもとに駅周辺構想素案をまとめ、住民のコンセンサスを得るため、フォーラムを二回開いた。また、一〇人程度に分け、円卓会議を開き、素案の比較検討も行った。

それをもとに、福島地区のまちづくりの提案がまとめられた。それによると、観光客は旧町地区に集中し、福島地区は「にぎわい」に乏しいとして、回復のための提案を行っている。そして「にぎわい」回復のために、「交流・観光の力」「地域・市民の力」「歴史・文化の力」が必要としている。

「おわら風の盆」には3日間で30万人が訪れる

「交流・観光の力」では、「にぎわい」を持続的なものにするには、定住者と観光客などの訪問者の交流が不可欠として、集客施設の整備、街路・広場空間の整備、催事の立ち上げ・充実、散策・回遊ルートの設定・整備などを提案している。

「地域・市民の力」では、今後のまちづくりは、住民や地域組織が主役となってマネジメントしていく場面が増えることから、福島地区でも地域団体の主導性の確保や、市民の多様な活動の助成がまちづくりのテーマになるとしている。具体的なアクションとして、施設・催事運営の参画、地域・市民活動を誘発する施設の整備、町並み協定の締結などを提案している。

「歴史・文化の力」では、歴史的な建造物の保存活用、文化芸術活動の促進、地場産業のアピールなどをあげている。

さらに、駅周辺の空間の整備、越中八尾駅の再生、交流・観光施設の新設、駅周辺の駐車場の整備、駅前通り街路整備、小広場づくりなど、一九の具体的なまちづくりプロジェクトを提案している。

行政と相談して、まちづくりを実行

十七年度は、四〇〇年近い歴史を持つ旧町地区の西町を対象に、調査・提案を行った。西町は河岸の小高い丘の上に位置し、八尾町の商店街の集積地だが、人口の減少に伴い商店も減少傾向にあり、空き店舗・空き家が目立っている。

東大都市デザイン研究室では四回の調査とワークショップを開き、提言としてまとめた。それによると、西町は若者の転出で人口が減少し、町の活力が低下していることや、魅力的な店舗が少ないこと、緑の空間が少ないことなどを指摘している。

そのうえで、空き家・空き部屋を活用して新たな住民を迎える仕組みをつくること、歴史的な建物である公民館の一部をギャラリー・喫茶として一般開放すること、対岸に階段状の護岸を設けることなどを提案している。

八尾町商工会では、「これらの提案は市にも評価していただいており、提案の中から行政と相談して優先順位を決め、まちづくりを進めていきたい」（中村事務局長）としている。